

IS学園に入学したので
皆に眼鏡をかけてもら
いたい

陽夜

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

世界で初の男性IS操縦者”織斑一夏”には親友がいた

彼の名は”桐崎 優(きりさき ゆう)”。一夏と同じくISを機動させた二人目の
男性操縦者である。

これは、IS学園の女の子達に眼鏡をかけてもらうことを夢見る男の物語

目 次

1. 眼鏡女子好きの僕が I.S 学園に入学しました	1	1.	眼鏡女子好きの僕が I.S 学園に入学しました	1
2. クラスマイトに金髪美少女がいるので眼鏡をかけさせたい	17	2.	クラス代表ではなく眼鏡つ娘をかけての戦い	78
3. 僕の同居人が眼鏡をかけた水色の美少女だつた	28	3.	番外編 ～赤髪眼鏡つ娘の意外な一面～	90
4. 幼馴染の姉が天災で僕の許嫁（本人談）らしい I	41	4.	金髪美少女を眼鏡つ娘にする準備は整つた	78
5. 幼馴染の姉が天災で僕の許嫁（本人談）らしい II	55	5.	幼馴染の姉が天災で僕の許嫁（本人談）らしい II	105
6. 金髪美少女に手取り足取り教えて欲しかつただけ	67	6.	金髪美少女に手取り足取り教えて欲しかつただけ	1

1. 眼鏡女子好きの僕が I.S 学園に入学しました

”レンズを通して見るこの世界は、とても透き通つているように僕には感じる”

いつからか視力の低下に伴い使い始めた”眼鏡”。最初は視界の変化に違和感を感じたり付け外しが面倒だなあくらいにしか思つていなかつたけど、そんな不満はすぐに消え去り直ぐに自分の身体の一部のように馴染んでいった。

でもラーメンを食べる時に必ず曇るのは昔からずつと困つてゐるんだ。いちいち気にしなきやいけないからね。

え？ 眼鏡を外せばいいって？ ま、まあそんな細かい事は言わないでよ。

しかし慣れというのも怖いものだと思う。以前一度寝ぼけて床に落ちていた眼鏡を足で踏み潰してしまつた時は絶望した。新しいのを作るまでぼやける視界にイライラして日常を過ごすだけでストレスが溜まつたものだ。

と、そんな事は今はどうでもいいんだ。唐突だけど、実は：

僕の親友が、目の前で I S を動かしています。

「ど、どどどどうしよう」
優!?

こつちのセリフだよ。本当に勘弁していただけませんか一夏君。

「とりあえず降りられないの? その I S から」

「えーっと、ちょっと待てよー」

そんな悠長にしてる余裕ないつて。こんな所誰かに見られたらーー 「そこの二人、此

2 1. 眼鏡女子好きの僕が I S 学園に入学しました

「もう筆記試験は始まっていますよ…つて、えええええつ!?お、男!？」
見回りの試験官さんかな？まあ、そういう反応になりますよね。寧ろこの状況で冷静な自分が恐ろしくなるよ。

「な、なんで男がＩＳに…う、上の人に連絡しなきや！」

焦つた様子の女性は携帯を取り出すと、一目散に何処かへ電話をかける。

प्राचीन राजनीतिक विचारों का अध्ययन

「あつ、も、もしもし！い、今私の目の前で——」

あーあ、これは面倒事になるのは確定だね。

僕達はただ高校受験をしに来ただけなのになあ。

一夏が躊躇してI.Sに触れなければこうはならなかつたのになあ。
「うつ、そんな目で見ないでくれよ…」
まあいいや。今はそれよりも、ね?

「お姉さん、その眼鏡よくお似合いですよ。素敵です」

「……えつ？」

このお姉さんの眼鏡姿を褒める方が先かな。

美しい人がかければより一層知的な雰囲気を醸し出し、天真爛漫で元気一杯な子がかければギャップが生まれる。眼鏡とはそんな素晴らしいアイテムなんだ。

僕の周りの人でも、一夏のお姉さんや中国娘の幼馴染なんかがいい例かな。「えーっと、この先を右に曲がって…」

眼鏡の魅力を語るとキリがないのでここら辺にしておこう。さて、僕は今ある学校の校舎の廊下を歩いている。

「あつた。あそこの教室だね」

時刻は朝早い。今日は入学初日の授業開始日なのだが、僕は寝坊してしまった。
昔から朝には弱いんだ。眼鏡をかければ瞬時に意識は覚醒するが布団の魔力からは
中々離れられない。

「（一夏大丈夫かなあ。まだ教室に入つてない僕でも心臓ドキドキしてるのでに）」
とは言つてもこれ以上遅れるわけにはいかない。自分のクラスと思わしき教室の前
に辿り着いた僕はドアに手をかけ一呼吸置く。

「（ふう、よしつ）」

ガラガラガラッ

「すいません、遅くなりました」

「遅いぞ”桐崎”。初日から何をしていた」

「寝坊しました」

「…ほう？」

ゆっくりとヒールの音をコツコツと鳴らしながら近づいてくる黒いスースの女（鬼）。
手には出席簿を持っていてーーって、ち、千冬さん？どうしてそんな硬そうな物を振り
かぶっているのですkーー

スペアアアン!!?

「いつつ！」

6 1. 眼鏡女子好きの僕が I S 学園に入学しました

「馬鹿者。初日から寝坊してどうする」「す、すいません…」

て、手加減無しですか。まあ僕が悪いのには違いないんだけど。

「今はちょうど織斑が自己紹介を終えたところだ。ついでにお前も自己紹介をしろ」

一夏の方をチラツと見るとドンマイとでも言いたげな顔をしていた。
ついでにその戦場を乗り越えたような誇らしげな態度をやめなさい。どうせまとも
な自己紹介も出来てないんでしょ、一夏だし。

スタスタスタ

「（…流石に女子しかいないとなるとやっぱりきついなあ）」

教卓の前に立った僕は改めて教室の中を見渡す。どこを見ても女の子しかいない。
もちろん異物である僕達二人を除いてね。

あ、そうだ。僕が今どこに居るのかを言うのを忘れてた。

「今日からこの” I S 学園” に入学しました桐崎 優(きりさき ゆう)です。眼鏡をかけた女性だけを愛しています。よろしくお願ひします」

結局、あの後すぐに入学の手続きをやらされました。

「ねーねーゆーくん」

ん？呼ばれた、のか？

「…えっと、ゆーくんというのは僕の事ですか？」

「そうだよー」

他の生徒達の自己紹介も含めて最初の授業が終わつた。そのまま僕は自分の席に座つていたのだが、雰囲気がのほほんとした女の子が話しかけてきた。

「(…うん、似合いそうだ)」

ピピッ、と脳内眼鏡センサーを発動し、即座にイメージする。彼女が眼鏡をかけた姿

を。

『やだつ、眼鏡取られるとはずかしいよ…』

うん、素晴らしい女子の予感がするね。

「すいません、ちょっとこの眼鏡かけてもらえませんか？」

「えつ、め、眼鏡？」

「嫌なら構いませんが」

僕が彼女に差し出したのは赤い縁の眼鏡。予備として何個か持ち歩いているうちの一
つだ。

「んーなんだかよくわからぬいけどいいよー」

「ありがとうございます」

素直に眼鏡を受け取った彼女はそのまま下に向いて：装着！

「これでいいのー？」

そう言つて顔を上げる。

「……ツツ!?」

「似合つてるかなー？」

思わず絶句してしまった。何故なら——

「可愛すぎる…」「え、ええつ!?!」

凄く似合っていたからだ。

「とても似合っていますよ。貴女が醸し出す柔らかな雰囲気にぴったりです」

「そ、そう?えへへー」

ぐはっ。な、なんですよ。ただでさえ天使みたいなのに加えて頬染めまで…最高ですね。思わず鼻血が出そうです。

「是非とも眼鏡をかけることをお勧めします。今の時代は伊達眼鏡というものもありますから、視力が悪くなくとも問題ありません。どうでしょう?」

「ゆ、ゆーくん?ち、近いよ…」

おつといけない、僕の悪い癖が出てしまった。

それにもかかわらずこの子、近くで見るとより一層可愛いな本当に。入学初日からこんな子とお近づきになれるなんて僕は運がついてる。

「ひやつ!?

眼鏡を外してあげようと手を伸ばしたらビクツ、という反応と共に可愛い悲鳴をあげ

られてしまつた。これだけ距離が近いと確かに驚かれるのも無理はない。

「ごめんなさい。眼鏡を外そうと思つて」

「あつ、う、うん。はい、どうぞ」

距離を離すと同時に受け取つた眼鏡をケースにしまつて鞄に入れる。

「そう言えば貴女の名前を聞いていませんでしたね。お名前は?」

「布仏 本音（のほとけ ほんね）だよー」

「じゃあ本音さんで。良いものを見させていただきました、ありがとうございます」

天使、いや女神には感謝の意を述べなくては。ありがたやありがたや。

「むうう、ゆーくんいじわるー」

「あははつ、ごめんなさい。つい貴女が可愛くて」

「も、もうつ！ 私席戻るねつ！」

駆け足で自分の席へと本音さんが戻つて行つてしまつた。もう少し話していたかつたけど、仕方ないか。

「優、ちよつといいか？」

次の休み時間、一夏が僕に話しかけてきた。

「どうしたの？」

「お前に紹介したい奴がいるんだ」

…え？

「一夏、確かに勢いつていうのも大事だとは思うけどやつぱりお付き合いするならちゃんと相手のことによく知つてから——「ち、違えよ！いいから来い！」

あれ、違うのか。一夏に引っ張られるがまま廊下に出るとそこには僕達を待っていたであろう一人の美少女が。とても眼鏡が映えそうな綺麗な髪の毛と整った顔立ちをしている。

「えつと、彼女は？」

「…わからないか？優」

一夏に問われるが僕にはわからない。じーーっと彼女を見つめていると何処かでと頭の中で引っかかる。

「(こんな時は、眼鏡を付けさせて考えよう)」

本音さんのときと同じように頭の中でイメージする。んーこんな感じかな?

『や、やめてくれ。私に眼鏡など似合つて…えつ?か、可愛い?私が?』

…ふふつ、ありがとう。少し恥ずかしいが、お前に褒められるのは嬉しいな』

デレた時の破壊力が半端じやなさそだね、うん。というか心当たりを思い出した。
もしかして彼女は…

「篠さん?」

「!そ、そうだ。久しぶりだな優」

「よかつた合つてた。小学校以来ですね」

「まさか優にもまた会えるとは思わなかつた。お前は少し変わつたか?」

そういう篠さんは昔から変わらず美少女だね。より大人っぽくなつて。

彼女は篠ノ之 篠(しののの ほうき)。僕と一夏が小学生の時の幼馴染だ。剣道が
凄く上手でよく一夏と打ち合つてた記憶がある。

「僕は別に変わつてないと思うけど…」

「嘘つけ。少なくとも篠の知つてる優とは180度別人だぞ」

「そうなのか？」眼鏡をかけている”ことくらいしかぱつと見では変わっていないうに見えるが」

「ああ、眼鏡をかけ始めた時は篠さんはもう転校した後だつたからね。

「さつき優が自己紹介で言つてただろ？」

「眼鏡をかけた女性がどうのこうのというやつか。驚いたぞ、あんなことを大衆の前で言うとはな」

「別に恥じることでもないし、僕は包み隠さずオープンにするタイプですよ」

最初は気恥ずかしさもあつたけどね。

あ、それと僕の女性に対する敬語とさん付けは癖なんだ。 同年代の子でも変わらないね。鈴ちゃんは例外だけど。

「…そうちか、眼鏡をかけた女性が好きなのか」

「何か言いましたか？ 篠さん」「い、いや！ なんでもないぞ！」

ボソッと小さな声で何か言つた気がしたけど、気のせいかな。

さて、それじやあ早速篠さんにも眼鏡をかけてもらうとしますかね。

「よかつたらお願ひしてもいいですか？ 篠さんの眼鏡姿、見てみたいです」

「わ、私がか？」

「はい。無理にとは言いませんが」

僕は決して押し付けるようなことはしない。あくまでも趣味嗜好であつて自分の中で満足したいだけだからね。

「う、うう、し、しかしだな」

「いいじやないか等。少し眼鏡かけるくらい」

ナイースアシストだよ一夏。やつぱり君は気の利く男だ！

「だ、だが肝心の眼鏡が此処にはないぞ！」

「それなら僕のをどうぞ」

「ゆ、優のだと!」

今僕がかけている眼鏡を外して等さんに差し出す。ちなみに今日は普通の黒縁眼鏡。シンプルイズベストというやつだ。

「…わ、わかつた。眼鏡があるならかけるべきだな、うん」

何かを自分に言い聞かせるようにしながら等さんは眼鏡を受け取る。そして耳にかかるつている髪の毛を上げる仕草の後に…装着！

「ど、どうだ？」

：ああ。樂園は此処にあつたんだね、父さん。

【結婚を前提にお付き合いしたいくらいに似合っています。とても綺麗ですよ等さん】

「な、なあつ!？」

篠さんの眼鏡姿はまるで、クラスを纏める真面目なお堅い委員長のよう。でもきっと裏では親しい人に甘えちゃうタイプなんだと思う。いやそうあってくれ。

それにも関わらず眼鏡というものは凄い。僕をこうも簡単に笑顔にさせてくれる。きっと緩みきつた顔をしているだろう、今の僕は。

「良いものが見れました。ありがとうございます。外しますね?」

「は、はいっ！」

あ、あの篠さん? 眼鏡を外すだけなのに何をそんな決心したように目を瞑るんですか? 何かを待っているように見えるけど。

「んっ…」

おっと、顔に手が触れてしまつた。今は眼鏡をかけていいからあんまりよく見えないんだよね。

「はい、もう大丈夫ですよ」

「う、うむ」

慣れない眼鏡に緊張でもしたのかな。顔を赤くさせてしまつて少し悪いことをした気分だ。

16 1. 眼鏡女子好きの僕が I S 学園に入学しました

「そろそろ戻りましょうか。次の授業が始まってしまいます」
「そ、そうだな！ 戻るしよう！」

まだまだこの学園にはきっと眼鏡が似合う女の子達が沢山いるはずだ。全員とはい
かなくても何人か眼鏡女子を増やせたらいいな。

「…あれ、俺つてもしかして忘れられてる？」

2. クラスマイトに金髪美少女がいるので眼鏡をかけさせたい

”眼鏡女子？別に好きじゃないよ” と言うそこの君。そんな貴方に一つ考えて欲しいことがあるんだ。

もしも自分に好きな人がいたとする。そしてその好きな人が、次の日の朝会うと新しく眼鏡をかけ始めていた。

この瞬間から君は”眼鏡をかけた女性が好き” という枠組みに加わるわけだ。つまり眼鏡女子が好きということになる。うん。

だから是非とも”眼鏡女子愛好会” に参加して欲しいと思う。ちなみに会員は僕と弾君と数馬君だけ。ご入会お待ちしております。

「私は織斑君がいいと思いまーす！」

「なら私は桐崎君で！」

さて、僕と一夏の名前が生徒達から告げられているこの状況。どうやら授業内の時間を使つてクラス代表兼委員を決めるらしい。

まあ代表つてことになつてくると客寄せパンダである僕達の名前が上がるのは仕方ないことだけど、正直言つてあまり僕は乗り気ではない。自分から進んで前に出て皆の前に立つたりするのは得意じやないんだ。

「ふむ、他にはいるか？」

千冬さんがクラス全体に問いかける。自他推薦可つて言つてたからね。

「ま、待つてくれよ千冬姉！」

勢いよく立ち上がる一夏。ここは学校なんだからその呼び方で呼んだら…
スパアアアン!!?

「織斑先生だ。次からは厳しくするぞ」

「いってえ…も、もう十分強すぎるんじや「ん?」な、なんでもないです！」
僕と同じく出席簿でぶつ叩かれる一夏。どんまい。ふふつ。

逆らわない方がいいよ。千冬さんは言うことを聞く従順な子には優しいからね。

「つて、そうじやなくて！俺と優の名前が上がつてるけど俺らやるなんて一言も言つてないですよ！」

「推薦された者が辞退することは認めん。皆に期待されているのだから応えてみせろ」

諦めなよ一夏。後は大人しくじやんけんなり多数決なりで決めよう。

親友が姉と言葉の格闘をしている最中、僕は先程から千冬さんの横に立つもう一人の教師が気になつて仕方がなかつた。

「ほ、他にはいませんかー？」

「緑色の髪の毛をした”山田 真耶” という僕達のクラスの副担任。千冬さんと対称的でおつとりとした雰囲気が漂ういかにも優しそうな人だ。
いや、重要なのはそこじゃない。なんと彼女：

眼鏡をかけているではないか！

素晴らしい。素晴らしいですよ先生。まさか進んで自ら眼鏡女子になつてくれているとは。

「(き、桐崎君、もしかしてずっと私のことを見ているんですか?だ、ダメですっ、そんな情熱的な目で見られたら、私…!)」

おつと、ついつい山田先生の方をじっくりと眺めてしまつた。女性を遠目から凝視するなんて良くないね。だからここは一つ妄想させていただこう。

『あ、あの。お弁当を作つてきたんです。よかつたら一緒に食べませんか?…その、二人きりで』

い、いけない！教師と生徒なのに、このままじや禁断の関係になつてしまいますが山田先生！

というか眼鏡が全く関係のないシチュエーションが頭に浮かんでしまつた。何故だろう。でも素晴らしい。

妄想に自己満足していると背後から何やら視線を感じたので振り返ると筈さんが僕

を睨みつけるように見ていた。ど、どうしたんだろう。クラス代表決めが長引いてるからライライラしてるのかな?

それとも僕に『早く手上げて自分がやりますって言えや』的な視線なのだろうか。

バンツ!!?

「納得がいきませんわ! こんな野蛮な男達にクラス代表の座を任せたなど!」

クラスメイトの一人、金髪の子が机に勢いよく手をついて立ち上がる。いきなりどうしたんだ?

「イギリスのオルコットか。それはつまり織斑と桐崎にはクラス代表を認めるわけにかないということでいいんだな?」

「ええ。此処はやはり貴族であるわたくしが相応しいということでのこの”セシリア・オルコット”が立候補致しますわ」

ほう。どうやら僕達では不満らしい。

「クラス代表には実力がトップの者がなるべきなのです。そしてそれは代表候補生であるわたくしにこそ相応しいですわ。それを物珍しいという理由で、こんな知識も持たな

い猿が選出されでは屈辱ですわ！」

凄い自信だなあ：つて、違うよ！猿つてどういうこと？オルコットさんの中での僕達の評価酷すぎない！？

「大体、このような文化が後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体わたくしには耐え難いことで——」

い、いやオルコットさん？どうして急に不満を述べ始めるんですか？日本だって良いところ沢山あるんだからそんなに侮辱を言われると悲しいな。後千冬さんの顔が段々と怖くなつてきてるのがホラーだよ。もうそろそろ発言を控えてみてはどうでしょう。「イギリスだつて世界一料理がまずいつて何年も天下取つてるだろ。そつちの国こそ大したことないんじやないのか？」

お猿さん1号や。何故君は火に油を注ぐような発言をするんだい？猿2号である僕は疑問でしようがないよ。愛国心でも芽生えたか！

「あ、あなた！わたくしの祖国を侮辱しますの！？」
「先に日本を貶してきたのはそつちだろ」

その通りだね。

「ツツ、決闘ですわ！」

再び机を強く叩いて宣言する。ちょっと、そんなにバンバン叩いたら机さんが可哀想

だよ。これからお世話になるんだからもう少し大事に扱おうよ。

「おう、いいぜ。その方がわかりやすいしな」

「ちょ、ちょっと待ってください！」

「ずっと黙つて二人の会話を聞いていた僕もこればかりは乱入しないと面倒なことになると判断し会話を割り込む。

「これはクラス代表を決める話し合いのはずです。何も決闘にまで持ち込む必要は何処にもないと思われます」

「いや、今回はオルコットの意見を採用する。折角の機会だからお前達もＩＳにしつかりと触れてみろ」

待つて待つて待つて。勘弁してくださいよ本当に。千冬さんが乗り気になつたらもう止める人がいないじゃないですか。

「ふつ、貴方は何もせず逃げるのですね。まあ妥当な判断だと思いますわ。今から初心者が努力したところですすめの涙程にしかなりませんもの」

——このオルコットさんの発言で、僕の中で何かが切れる音がした。

24 2. クラスマイトに金髪美少女がいるので眼鏡をかけさせたい

”なんなんだよこの女。さつきから何ほざいてんだよ。”

「誰が、逃げるつて？」

ゾワツ!!?

「「「ツ!?:?」「」

「いいよ。この勝負受けて立つてやる」

「…そ、そうですか！せ、精々恥をかかないように努力するのをお勧めしますわ！」

「ああ。そうさせてもらう」

煽り耐性ないからね僕。完全にぶつちんだよ？おこだよ？

「優、その辺にしておけって」

「…うん。そうだね。ごめんなさい皆さん。オルコットさんも」

「へ？あ、は、はい」

随分と怖がらせちゃったかな。初日からイメージが大きく下がった気がする。
はああ。

「勝負は一週間後、放課後にアリーナで行う。織斑、桐崎、オルコットはそれまでにしつかりと万全の体制を整えておくように」

千冬さんから日程が告げられる。ふむ、そうか。これを”一週間しかない”と考える
か、または”一週間もある”と考えるかは大事だね。

あ、ついでに一つ言うのを忘れてた。

「オルコットさん。僕が勝つたら貴女に眼鏡をかけていただいてもよろしいでしようか

「……はい？」
?

一日を終えた僕達はアリーナに関するこことを女神：じやなかつた。山田先生に聞きに行つたりと色々と行動を済ませ帰ろうとしていたんだけど。

「これがお前達の寮室の鍵だ。無くすなよ」

千冬さんに呼び止められ話を聞いたところ、どうやら初日から寮生活らしいです。偉い立場の人が僕達を学園に置いておけとのこと。監禁でもするつもりなのかなあ。

「織斑先生、僕と一夏は同室じやないんですか？」

「急遽決まつたことだから空き部屋がない。だから一人部屋の予定だつた二組の所にお前達を放り込むことになつた」

えつ、一人部屋じゃないどころか同居人がいるの？それって女の子じゃ：

「さあ、もう時間も遅い。早く行け」

「えつ、ちよつーーー」

突如会話を切斷して職員室の中へ戻つていく千冬さん。

荷物は既に最低限必要なものだけを母さんが送つてくれたらしい。アタツシユケースのような見た目の鞄に入つてる僕の”眼鏡これくしょん”達も送られてきたし、まあ当分は生きていけるかな。

「なあ優。女の子と一緒の部屋つてマズイよな？」

「うん。常識的にも危ないし男性操縦者として考えても女人と一緒にされるのはダメだと思うな」

貴重な男性操縦者のデータ取りもしたいはずだからね。女スパイによるハニートラップみたいなこともあるんじやないのかなあ。僕の勝手な想像だけど。

「…行くしかないか」

「そうだね。お互にいい同居人であつてくれることを願おう」

できれば眼鏡をかけていて欲しいけどね。こればかりは神頼みだ。

3. 僕の同居人が眼鏡をかけた水色の美少女だった

アニメや漫画の世界において”眼鏡をかけた女子学生”っていうとまず一番のイメージとして”教室の隅っこで一人本を読んでいたり、気の弱い少し控えめな性格をしている”って印象があると思うんだ。これは一種のキャラ付けみたいなものだと思う。もちろんこれは僕の偏見だし例外はあるけど、実際に学校生活で皆の周りにも一人はこういうタイプの子がいたんじゃないかな。

さて、これを別の視点から見てみよう。『眼鏡女子＝物静かでクールな人』と考えた時にその人のイメージとして新しく”もしかしたら実はドSで女王様気質かもしけれない”という可能性が生まれてくるんだ。

例えばスーツを着たOLさんとかを想像してみよう。ほわんほわんほわん。ほら、見えてきたでしょ？ OLさんが自分が履いているヒールで跪いている愚民をぐりぐりと踏んでいるシチュエーションが。

その人を彩る要素の一つとして無限の可能性を秘めている。眼鏡とはそんなアイテ

ムなんです。

「この部屋で合ってるよね」

千冬さんに渡された鍵と同じ番号の部屋の前に辿り着いた。一夏は僕より先に寮室を見つけたのでもう隣にはいない。

「(考えてても仕方ない。まあなるようになるでしょ)」

僅かな期待と少しの不安を抱える。肩身が狭くなるであろうこれから的生活の癒しになつてくれるような可愛らしい同居人だつたら嬉しいです。

それといきなり男が部屋に入つてきたら困るよね。中で着替えてないとも限らないしここは一応ドアノックしようか。

コンコンコン
ガチャツ

「えつ」

「あ、えつと、きよ、今日からこここの部屋に入る桐崎 優です！よろしくお願ひします！」

「ちよ、ちよつと。幾ら何でもドアが開くの早すぎない!?..? 待機でもしてたの!?..? 思いの外早くドアが開いたものだから焦つてしまつてつい勢いよく頭を下げてしまつた。変に思われちゃつたかな。

「…男の子？」

「頭の上から小さく声が聞こえる。まさか僕の事知らせてない感じですか千冬さん。割と本気で困りますよ。」

「あ、はい」

「とりあえず、顔を上げて」

「言われるがままに頭を上げ、目の前の彼女を視界に入れたその時——

僕の身体に、一筋の電流が走つた。

「（なつ、め、眼鏡女子？？）」

水色の綺麗な髪の毛に加えてまさかの眼鏡装着済み。完全に僕の時代が到来しているのだがそれだけでは終わらない。

——可愛い。僕の好みど真ん中だ。ど、どうしよう。目が見れないんだけど。

「あー、その、えっと…」

な、何か言わないと！

「（貴女の眼鏡姿が）…好きです」「……は？」

唐突な告白（？）の誤解を解きなんとか部屋に入れてもらつた僕。彼女がお茶を入れてくれるということで椅子に座つて待つっています。

「はい」

「ありがとうございます」

とりあえず一口飲んで自分を落ち着かせよう。

「ふう、美味しいです」

「そう」

クールな人なのかなあ。それとも警戒されてたりする？まあそれが普通だけどさ。

「驚きました。ノックしてすぐに入り口の近くにいたからすぐに反応出来ただけ」

「たまたま入り口の近くにいたからすぐに反応出来ただけ」
なるほどね。別に待機してたわけじゃないと。そりやそりや。

「貴女の名前をお聞きしてもよろしいでしようか？」

「”更識 簪（さらしき かんざし）”。苗字で呼ばれるのは嫌だから簪でいい」

「わかりました。では、簪さんと」

おお、流れで名前呼びを許可してもらつたぞ。やつたね。

「織斑先生から同居人が来るつていうのは聞いてたけど、まさか男の子だとは思わなかつた」

「…なんか、すいません」

「気にしなくていい。見た感じ悪い人でもなさそうだから」

初対面で好きですとか言つたのに悪い人じやないつて、優しすぎるよ簪さん。本物の天使か何かですか。

「そつちのベッド使つて。こつちは私が使つてるから」

「はい、ありがとうございます」

とりあえず荷物を整理しよう。まだ送られてきた物も全部は確認してないからね。

「——があつて、こつちの眼鏡もある。うん、大体は揃つてるかな」
ケースを開いて眼鏡達を一通りチェックする。

毎日変えるわけじやないけど僕は気分や日によつて付ける眼鏡を選ぶ。大きさとか
形が少し変わるだけで印象や雰囲気を左右してくれるからね。僕なりのオシャレの一
つだと思つてもらつて構わない。

と、少しの間一人で作業していると簪さんから視線が向けられていることに僕は気づ
いた。

「どうかしましたか？」

「それつて……」

「普通の眼鏡ですよ。此処にあるのはざつと10個近くでしょか」

鞄の中にも数個と今自分でかけてるのもあるからこれだけじやないけど。

「……眼鏡コレクター？」

「集めるのが好きというのとは少し違いますね」

「じゃあどうしてそんなにあるの？」

おや、何やら興味を持つてゐるみたいだ。まあアタツシユケースに入つてたのが眼鏡
でそれが一個や二個どころかたくさんあつたら氣になるよね。

「簪 side」

彼との会話が終わるとすぐにベッドの上で何やら作業を始めたので気になつて見ていたら凄い数の眼鏡が出てきて驚いた。

詳しく述べ聞くとどうやらそれは彼の趣味で”女人にかけてもらうため”に持ち歩いているらしい。

「（：眼鏡の女性が好き、なんだ）」

流れで彼の好みのタイプを知つた。

これで最初の一言目も納得がいく。私が眼鏡をかけているからだ。

「いきなり好きですなんて言うからチャラい人なのかと思つたけど違うみたい」
まだ少ししかお話してないけど優しそうな人だと思う。喋り方も丁寧だし笑顔も自然で柔らかい。

「簪さんはとても眼鏡が似合っています。素晴らしいです」

「…ありがとうございます」

眼鏡をかけた女の人が好きって言われた後に私が褒められると心臓に悪いからやめてほしい。ドキッとして少し動搖しちゃつた。

「その眼鏡達を皆にかけてもらうの？」

「はい。といつても嫌がる人には押し付けたりしません。あくまでも僕の趣味嗜好に付き合つてくれる人だけでいいんです」

一步引いた冷静な考え方。紳士的というのは、ことこのどだろうか。

「あ、そうだ。簪さんもお一ついかがですか？」

「私？」

「ええ。是非とも他の眼鏡姿を見てみたいです」

見てみたいとか言われるとなんだか恥ずかしい。彼の顔から期待されてるのがわかるから尚更。

「…じゃあ、一個だけなら」

「ありがとうございます。それで、どれにしますか？」

「桐崎君が選んで」

「これだけ沢山あると選ぶのに迷う。それに、眼鏡をかけて欲しいと言うのなら彼に選

ばせてあげてもいいだろう。

「そうですか。なら…これでお願いします」

渡されたのは普通の黒縁メガネ。数ある中でもシンプルでよく見かけるものだ。「ん、付けるから後ろ向いてて」

「は、はい」

眼鏡外すところ見られるのもなんだか恥ずかしいから彼に後ろを向くよう急かした。

「(やつた、簪さんに僕の眼鏡をかけてもらえるぞ!)」

後ろを向いている僕は隠しきれない興奮から静かにガツツポーズをとつていた。だつてこんな可愛い子に眼鏡かけてもらえるんだよ?嬉しいに決まつてる。

「いいよ。こっち向いても」

ツ、遂に運命の瞬間だ。一体どんな天使が君臨しているのか、心臓が破裂しそうなく

「どう、かな？」
らしいバクバクしてる僕には想像もつかない。

水色の髪の毛に黒い眼鏡。落ち着かない様子の簪さんは眼鏡を触りながらそわそわしている。完全に僕好みに仕上がった彼女がそこにはいた。

——感想を言わなきやいけないのに言葉が出ない。でも簪さんから目が離せない。
ああ、ダメだ。これつてもしかして……

「可愛すぎます。犯罪級です」「……は、恥ずかしいからそういうこと言わないで」

僕、彼女に一目惚れしちゃつたみたい。

「んー」

カタカタカタ

モニターを前に、何かを打ち込む女が一人。

「あつ」

ピタツ、と何かを思い出した女は指の動きを止める。

「そつか、今日つて I S 学園の入学初日だつたね」

今年は世界初の男性操縦者が二人もいる。きっと今頃学園の外も中も盛り上がりいろいろだろう。

「二人には専用機が必要だよねえ。うんうん」
何かを言い聞かせるように一人頷く。

「待つててね” ゆーくん”。この東さんが自ら最高のおもてなしをしてあげちゃう
よー」

4・幼馴染の姉が天災で僕の許嫁（本人談）らしい I

「よし。これで全部ですね」

授業で使用した教材を運ぶために教室と資料室を行き来して2周程。ようやく全て運び終えた僕は一息つく。

「ありがとうございます桐崎君！本当に助かっただよ！」

「ありがとうございます桐崎君。やっぱり男の子は頼りになりますね」

「これくらいお安いご用です。お二人に重い物を持たせて苦労させるわけにはいきませんからね」

今ここにいるのは我らが女神こと山田 真耶先生と、もう一人は今朝面識を得たクラスメイトの”岸原 理子（きしはら りこ）”さん。彼女なんと既に眼鏡装着済みです。素晴らしい。二人目の女神降臨だね。

「もーそんなこと言つちやつて！あんまり女の子に優しすぎるとやましい気持ちがあるんじやないかって疑わしくなつちやうよ？」

「そう言われましても…」

「ダメですよ岸原さん。桐崎君は純粹に善意で私達の手助けをしてくれたんですから、悪く言つてはいけません」

「ああ、女神。圧倒的女神。その優しさに惚れてしまいそうです。」

「そうだよ。僕は純粹にお手伝いがしたかつただけだから。べ、別に二人が眼鏡かけてるとかそそそそそんなことは関係ないんだからねつ！」

「んーそれじやあそんな優しい桐崎君に何かお礼しないとだね、先生！」

「え？ あ、はい。そうです…ね？」

「たかが教材運びを手伝つたくらいでお礼なんていいのに。それと山田先生、岸原さんの勢いに乗せられてますよー。」

「お礼なんてそんな、結構ですよ」

「…本当にいらぬの？」

「うつ、そう言われるとまた困る。褒美が出るのを自分から断る人なんていないでしょ。」

「ではお礼とは何をしてくださるのですか？」

「なんでもいいよー」

「な、なんでも…!?」

顔を赤くして狼狽えないで下さい先生。別に変なことを言うつもりはありませんよ。

「じゃあ”理子さん”とお呼びしてもよろしいでしょうか？是非ともこれを機にお近づきになりたいです（お友達として）」

「…ふえつりう？お、お近づきにりう？（男女として）」

ん？なんか予想より驚きが強いぞ。僕そんなに変なこと言つたかな。

「わ、わわわっ！せ、先生はお先に失礼しますねっ！」

「あっ、山田先生：行っちゃった。いきなりどうしたんだろう」
突如逃げるよう走り去つて行く山田先生。なんだなんだ何が起きているんだ。先生にも今後何か手伝えることがあれば遠慮なく頼つてくださいねつて言つておこうと思つたのに。

「（き、桐崎君と二人つきりになつちゃつた。ど、どうしよう。なんか緊張してきちゃうよ…！）

理子さんも何故かもじもじし始めるし。え、僕何かした？

「…これってさ、そういうことなんだよね？桐崎君」

「はい。そういうことですよ」

言つた通りの意味だと思うけど。もしかして伝わりづらかつたのかなあ。

「私なんかでいいの？まだ少ししかお話してないんだよ？」

「だからこそ此処から仲良くなりましよう。僕、貴女のことをもつと色々知りたいです」

眼鏡女子とお近づきになれるチャンスだからね。逃はしないよ。

「あーもうどうしよ。私の顔から火が出そうだよ。…これは責任取つてもらわないとだ

ね」

「えつ？」

ん？彼女今なんてーー

「ふふつ、これからよろしくね”優くん”。私のこと大事にしてくれたら嬉しいな」

僕がまだ小学生の頃に一度だけ、千冬さんに眼鏡をかけてもらつたことがある。確かに篠ノ之道場でやつてた一夏と篠さんの試合が終わるのを待つてた時かな。

勿論あの千冬さんがすぐに Yes と頷くわけはない。だがそんな頑固鬼姉を前にしても当時の幼かつた僕は中々にわがまま度が高く引き下がらなかつたのだ。

やがて折れた千冬さんは『一回だけなら付けてやる』という台詞と共に僕の差し出した眼鏡を受け取つてくれたのだ。

「——あの時の千冬さん、綺麗だつたなあ」

「まるで今の私が綺麗ではないような言い方だな」

「SPA AAA ANN TT!!?」

「まさか。今の方が断然大人の魅力が増してお綺麗ですよ。ですから是非また眼鏡をかけていただきt 「あの時の一回だけだと言つただろう」 …ちえつ」

断られると同時に冷静を取り戻した僕に頭を出席簿で叩かれた痛みがじわじわと襲つてくる。い、痛いけど我慢しなきや。

「そろそろ本題に入るぞ。お前と織斑に関することだ」

「あれ、一夏もですか。でしたら呼んできた方がよいのでは？」

ちなみに今は職員室の千冬さんの机の前だ。話があるから来いと言つて呼び出された。

「今はいい。とりあえずはお前が最優先だ」

「はあ」

僕を優先させる理由はなんだろうか。

「お前達二人に専用機が渡されることになつた」

「入学して間もない初心者の僕達にですか？」

「ああ。自衛用のISを持たせるのと男性操縦者のデータ取りが主な目的だろう」

ふむ、そうか専用機か。まあ男性操縦者は貴重だから支給されてもおかしくないのかな。

「織斑の方の専用機は”倉持技研”が担当する事になつていてるがお前の方はまだ決まっていない。だが、どうやらお前にテストパイロットになつて欲しいと強く言つている所が一つだけあるらしい」

千冬さんから紙が渡される。そこには黒いボールペンで電話番号のみが書かれていった。

「かけるかかけないかはお前の自由だ

「ええ……これ怪しそぎません?」

普通こういうのは名刺を渡しておくんじやないの？電話番号だけつて…企業名とか担当者の名前とか書くこと色々あつたでしょ。

部屋に戻った僕は一人電話を片手に悩んでいる。簪さんは今は隣にはいない。「（かけるだけなら何も問題ないと信じたい）」

行動は起こさなきや始まらない。物は試しだ、かけてみよう。

p r r r r r r r p r r r r r r r

p r r r r r r r r p r r r r r r r r

ピツ

『.....』

「あ、あれ？繋がった…よね？」

携帯の画面を確認すると確かに通話は開始していく1秒ずつ時間が経過している。
しかし電話の向こうから声は一切聞こえてこない。
「えっと、お話をいただいた桐崎ですが…」

『.....ふふつ』

ピツ

「…………ッ!!?」

「背筋が凍つた。今電話が切れる前、微妙に笑う声が聞こえた。

「（…まさか）」

咄嗟に此処においてはマズイと思つた僕は一直線に部屋の入り口のドアへと走る。そして鍵を外し扉を開こうとしたのだが——

ガチャガチャツ、ガチャツ！

「なつ、内側からなのに開かない…!!?」

何度も扉を開けようと試みるが何故か開かない。

スタ…スタ…スタ…

「（…ははつ、嘘でしょ？）」

足音が聞こえる。今は僕しかいないはずのこの部屋から。つまりその音は僕の背後から発生しているということ。

「やばい。これはやばいよ。とりあえず落ち着くんだ僕。どうするのが最善だ。相手

の目的は僕か？どうやつて此処に忍び込んだ？」

考える事はできる。だが解決策など一つも見つかりはしない。

（此処で誘拐なんてされたらきっと人体実験のたらい回しにでもされて廃人コース不可避だ。やるしかない）

とんとんとん

「——はあっ！」

何者かに肩を数回叩かれた僕はすぐさま振り返りそれと同時にパンチを繰り出そうとする。が、

プシユ——ツ!!?

「なつ……あ……く、そつ……」

スプレーのような物をかけられた僕は一瞬にして眠るように意識を失い床に倒れこむ。

視界が閉じる前に目に映つたのは、紫色の髪の毛と何処かで見たような服装だった。

『ねえねえゆーくん』

『どうしたの？おねえちゃん』

『私ね、この家を出て行かなきやいけないんだ』

『えー！なんでー！』

『ごめんね。だからもう会えなくなつちやうの』

『んーじやあおねえちゃんとぼくのやくそくをつくろう！』

『：約束？』

『うん！やくそくがあれば、きっとまたおねえちゃんとあえるもん！』

『また会つてくれるの？』

『もちろん！』

『…そつかあ。ふふつ、それならお姉ちゃんも心配いらないね』

『さみしくなつたらいつでもかえってきてね。ぼくもいちかもほうきちゃんもちふゆおねえちゃんもみーんなまつてるよ!』

「あ、起きた。おはようゆーくん」

薄つすらと僕は目を開ける。熟睡していた感覺だ。凄い眠気とだるさがある。

「まだ意識が覚醒していないねえ。もう少し寝ててもいいんだよ」

誰か分からぬいけど聞き覚えのある声がする。まあいや。言われた通り今はゆつくり寝かせてもらおう。

「…いや、待つて。誰かいるよね僕寝てる場合じやないよね」

「なーんだ起きちやうんだ。もうちょっと可愛い寝顔見てたかったのに」

今の自分の状態を把握しよう。まず場所は寮室の自分のベッドの上。時間はあれから少ししか経っていない。そして、隣には一人の女性が。

「えっと、貴女は?」

「そ、そんなあ。覚えてないなんてひどいよ」

覚えてない? 眼鏡がないからぼんやりとしか見えないけどこんな美人なお姉さんと僕に面識があるのか?

「うーん、何処かで…」

「そんなにじっくり食い入るように見られると流石に恥ずかしいかなあ。ま、まあゆーくんならいいんだけどね」

ちゃんと顔を確認しなきや。えっと、眼鏡眼鏡…あつた。装着!

「…………な、なにいいいつけ?」

「おや、その顔はようやく私のことを理解したって顔だね。というかゆーくんいつの間に眼鏡なんてかけるようになつてたんだい? 新発見だよ」

嘘だろ!!? どうしてこんなところに…

「た、東お姉ちゃん!!? 何でこんな所にいるの!!?」

「やあやあ長らくお待たせしたね少年。ゆーくんのお嫁さんこと”篠ノ之 東（しのの
の たばね）”が久しぶりに会いに来たよ！」

——僕の身の安全は大丈夫そうだけど、何やらまだ一波乱起きそうな予感しかしませ
ん。はあ。

5. 幼馴染の姉が天災で僕の許嫁（本人談）らしい II

”篠ノ之 束（しののの たばね）” という名前を知らない人は世界でもほぼいないと言つてもいいだろう。何故なら彼女は” IS 『インフィニット・ストラatos』” の生みの親なのだから。

僕が幼い頃等さんと友達になり、一夏と一緒に彼女の家である篠ノ之道場に遊びに行つた時に初めて顔を合わせた。その時は挨拶をしてもまるで見えていないかのように無視をされたけどね。束さんの他人に微塵を興味を示さない目が印象的だつたのを今でも覚えてる。

IS という世紀の大発明をした束さんは世間では篠ノ之博士だつたり天才ならぬ”天災”とも言われている。

まあ僕はこの愛称あんまり好きじゃないけどね。だつてあんなに美人な人が災いを呼ぶなんてことあり得ないし。綺麗だし。可愛いし。いい匂いする…のは関係ないか。

そんな冷徹な女のようなイメージもあつた彼女。今はどうしているかというと——

「あの、東さん？もうそろそろいいのでは？」

「やーだー！まだゆーくんの膝枕堪能するもん！」

ベッドに腰をかけている僕の膝の上に頭を乗せてリラックスしながら駄々をこねていました。

「ほら、早く頭撫でてよー」

「はいはい」

手を止めるとすぐに催促がくる。まあ見てるこっちが嬉しくなるような満面の笑みを浮かべられたら自然と撫でたくなるのだけれど。

「もうすぐ30分くらい経ちますよ。色々とお話を聞かなきやいけないんですから。専用機の事とか」

「…それだけなの？聞きたいことって

「えつ？」

「大事なことがあるよねえ？」

何だろう。筹さんと同じくらい久しぶりに会つたから話したいことはいっぱいあるけど重要なことと言われると特に思いつかない。一人僕が唸りながら考えていると束さんがようやく身体を起こし、僕に向けるようにベッドの上に座つた。釣られて僕も向かい合うように体の向きを直しベッドの上で正座をする。

「ゆーくんは今年で16歳だね」

「はい」

「IS学園に入学したけど、卒業する頃には18歳です」

「そうですね」

「じゃあ18歳になつたら何が解禁になるかな?」

「18から出来ることといえば:結婚?」

「そう!ゆーくんも結婚できるようになるんだよ!」

そういう法律だからねえ。それが何か関係あるのかな?束さんすごい嬉しそうな顔してるので。

「もー鈍いなあゆーくんは。」3年後にはもう束さんと結婚しててんのだよ?」

「……はい？」

『どんな約束にしようか、ゆーくん』

『おねえちゃんがきめていいよ！ぼくだとありすぎてえらべないから』

『一個だけじやなきやダメなの？』

『うんっ！こういうのはひとつだけなことにいみがあるつておかあさんがいつてたよ
！』

『んーそつかあ。どうしようねえ』

『ゆつくりかんがえてていいよー。ぼくはここでまつてるから
…ううん。もう決まつたよ。一つだけの約束』

『ゆーくん。ゆーくんが大人になつたら、私と結婚してくれますか？』

『もちろん！やくそくだからね！』

「はい？じやないよー！約束したの覚えてないのー！？」

「い、いや、ちよつと待つてくださいよ東さん！」

「むー、その東さんつて呼び方もやだなあ。昔みたいにお姉ちゃんつて呼んでもいいんだよ？」

「流石にこの歳でお姉ちゃんは呼べませんよ…つて、そうじやなくて！僕達がしたのつて結婚するつて約束でしたか？本当に？」

「そうだよ。 私から言つたことだから一字一句間違ひなく覚えてるもん」

ふんすつ、と自慢気に胸を張る東さん。

「（ああ：段々と鮮明に思い出してきたぞ。 確かにそんな話だつた気がする）」

約束をしたのも随分と前のことだつたから、東さんには本当に申し訳ないが先程まで完全に記憶の奥底に沈んでいた。

でも今は違う。 東さんが篠ノ之家を出る前に二人でゆつくり話をしたのを思い出した。

「さあ、ゆーくんもこれで思い出したことだしここからは結婚前の夫婦の営みの時間だね。 東さんもうこの日が待ちきれなかつたよ」

ま、マズいでしょこれ。 何だか東さんの目も獲物を狙う銳さみたいなの帶び始めてるし、このままだと僕喰われちゃうよ！

「ちょ、ちょっと待つて！」

「もうつ。 どうしたのゆーくん？」

どうしたもこうしたもないよ。 いきなりこつちに寄つて来られると心臓に悪い。 それも夫婦の営みとか言わるとドキドキが半端ないんだから。

「その、確かに約束したのは覚えてます。 でも僕はまだ小学生でしたし…」

別に東さんとの結婚が嫌とかそういう訳ではない。 むしろこんな美人で綺麗で優し

い人と結婚できるなんて幸せなことだと思う。

「(だけど今ままじや僕自身に納得がいかない。こんな綺麗な人にずっと想つてもらえてるのに、それを忘れてのうのうと過ごしてたんだ僕は)」

「えーでもゆーくんのお父さんとお母さんにも許可もらつたんだよー?」

「ちよちよちよちよい待つた!え、いつの間にお父さん達に掛け合つたんですか!!?」

「ゆーくんと約束した次の日。ほら、ご飯食べにおいてゆーくんのお母さんがちゃんといつくんと私と筹ちゃんを招待した時だよ」

「(あの時かーー!!?)」

一回も結婚の話なんて両親からされたことないのに気がついたら親公認になつてるんですけど!!?

嘘でしょ、つい数秒前まで自分に納得がいかないとか僕思つてたのになんかもう格好付かなくなつちやつたよ。恥ずかしい。

「お、お父さん達なんて言つてました?」

「息子をよろしく頼むよ東君」つて大歓迎されたよ。お母さんも優しい人だつたなー」「はは…そ、そうですか」

もう何も言うことはない。ああ、母よ、父よ、僕は今日婚約者と改めて結婚の約束を交わすことになりそうです。

：あれ、別に良くないか？このままだつたら僕卒業までには東さんと結婚してゐるだけでしょ？ただの幸せ者じやない？

↳ side 束 ↳

ゆーくんはどうやら“約束”を忘れていたみたい。まあちつちやい頃の話だから仕方ないのかな。少し、いや結構ショックだつた。

昔はあんなに可愛かつたゆーくんも私より身長が高くなつて顔つきも男らしくなつたと思う。ちょっと面影は残つてゐるけどね。

篠ちゃんといつくんも含めてみんなちつちやかつた頃から時が経つたのを実感させられる。それは少し寂しくもありでも何だか嬉しくもある。だってゆーくんが成長してゐるから。

「ゆーくんは今好きな人つているの?」

「え? い、いや、いないんですけど」

むつ、なんか怪しい。恋する女の子に嘘ついてもすぐバレるんだからね。

「…本当に?」

「…あー、可愛いなあつて思う子は一人います」

「ふうーん。そうなんだー」

ぬううつ、ゆーくんから好意的に見られるなんて羨ましい奴がいるもんだ!

「で、でも別に好きつてわけじゃないですよ」

「じゃあ私と結婚してよ」

今のゆーくんに対しても無茶を言つてるのは分かつてゐる。でもずっと今日まで思いで、毎日だつた。もうそんなのは嫌だもん。

「なんだつたら私以外の奥さんが出来てもいいからさあー、とりあえず18歳になつた

「ら私とは結婚しよ？ね？いいでしょ？」

「い、一夫多妻ですか」

「そうそう。悪くない話だと思うけどなあ。ハーレムなんて男の子の夢でしょ？ ゆーくんがそういうことに対してもう思つてゐるのかはわからないけどね。」

「あ、でも正妻の座はもちろんこの束さんね。ずっと前から結婚の約束してたんだから」「…どうしてそんなに束さんは僕を想つてくれるんですか？その、他に奥さんがいてもいいなんて言つてまで」

「おや、少年が何やら疑問を持つてゐるようだね。でもそんなの簡単なことさ。

「誰かを好きでいることに理由がいるかい？私はただず一つと、君のことを心の底から愛し続けてるだけだぜ” ゆーくん”」

——私つて、自分でも思つてるより一途な女だつたんだよ。ふふつ。

『でもいいの？おねえちゃんとぼくがけつこんしても』

『ゆーくんは私と結婚するの嫌？』

「束さん」

「んー？」

「僕がこのＩＳ学園を卒業する時まで待ってくれませんか？」

『んーん。ぼくたばねおねえちゃんみたいなきれいなひととけつこんしたい！』

『あはは、ゆーくんは女たらしの素質があるねえ』

「ここを卒業したら、改めて僕から貴女に言わせてください。結婚して欲しいって」

「ふふつ、格好つけすぎだよゆーくん。：でも、嬉しい」

僕から束さんへの好意はまだ恋人や愛する人へのそれには達していないだろう。

「本当に私でいいの？」

「断る理由がありませんよ。それに”約束”はきちんと守らないとね」

でも今はこれで良いのかもしれない。今日からまだ3年近くあるんだ。その中で束さんのことをもつと知ろう。好きになつていこう。

「んーじゃあ彼女出来たら報告してね。あ、結婚の話になつたら私の名前出してもいいから。三人で今後について話し合おうぜ」

「いやこの人色々とぶつ飛んでるな本当に」

まだまだ苦労させられそうだけどね。この人には。

6. 金髪美少女に手取り足取り教えて欲しかつただけ

「…………」

束さんとの話が終わつて部屋に一人になつた僕は眼鏡を手に取り眺めながら少し考え事をしていた。

”婚約者”という存在。しかも相手はあの世間を騒がす篠ノ之束。僕は普通の人から見れば奇想天外な人物にでも見えるのだろう。

そして束さんは世界に追われ身を隠している存在。そんな彼女と一緒になるということはそれ相応の男にならなくてはいけないと僕は思う。強くならなきやいけないのもそうだし他にも色々とね。

でもこういうのを考えるのはまだ後でいいのかな。今から思い詰めて仕方ないish何より3年も時間があるんだ。ISの知識や操縦技術はこれからしつかりと磨いていこう。今はそれよりも——

「…ダメだ。全くイメージできない」

皆も知つてゐる通り僕は自他共に認める眼鏡つ娘好きだ。眼鏡をかけていな子が
いれば脳内でかけさせて妄想したりもする。

だがしかし今の僕は何故か絶賛不調中。何度妄想しても東さんでは全く想像するこ
とができないでいる。その、なんというか、眼鏡をかけた東さんのことを考えていると
胸がモヤモヤするというか照れくさくなるというか。

「疲れてるのかなあ。今日はもう休むか」

自分に言い聞かせるようにして無理やり思考を中断し、かけている眼鏡と手に持つて

いた眼鏡をケースにしまつてからベッドに寝転ぶ。

そのまま目を閉じた僕の意識は、ゆつくりと闇に沈んでいった。

「次の日」

「——であるからにして、この公式を——」

「(千冬さんの教師姿は新鮮だなあ)」

頬杖をつきながら僕は授業の様子を眺めている。数学は得意分野のため他の事を考えていても少し余裕がある。

「(絶対眼鏡似合うと思うんだけどなあ。スーツ姿に合わせても)」

千冬さんは可愛いより綺麗とかかっこいいと言われる人だ。まあそれはわかる。現在ではISの世界大会で、昔は剣道でも実績を残していたしその姿は凛々しいの一言に尽きる。

でも織斑家では自堕落な一面あるからね千冬さん。家事とか一夏に頼りつきりだし。そういう部分はギャップがあつて可愛いと思う。本人は言えないけどね。殴られるから。

「(寝起きとかだつたらかけてくれるかな? 眼鏡)」

ああ、神よ。もし一つだけ願いを叶えてくれるなら是非とも千冬さんに眼鏡をかけさせてください。見たいんです。もう一度千冬さんの眼鏡姿。

『どうした優。私の眼鏡姿に見惚れているのか？もつと近くで見てもいいんだぞ。ほら、こっちに来い』

主導権を握っているのが千冬さんらしくて良いなあ。是非ともこれから先の人生も引っ張つていって欲しいですねえ。

ふふふ、妄想も絶好調だし今日こそ千冬さんにもう一度眼鏡をかけさせる案が思いつくかもしないぞ。よく考えるんだ僕。

「おい桐崎」

「(いつもそのこと寝ている間にかけさせようか。いや、千冬さんのことだ。寝込みを襲わ

れると本能が働いて返り討ちにあうかもしれない。何か他の案をーー)」

「…やはり授業を聞いていなかつたか。仕方ないな」

「スペアアアン!!?」

「いつたあつ!!?…せ、先生？ いつの間に僕の前に来たんですか？」

「お前が呼んでも反応しないからだ。授業は真面目に受けろ」

「織斑先生が眼鏡をかけてくれたら眞面目に受けます」

「SPAアアアン!!?」

「二度は言わんぞ。いいな?」

「…はい」

くつ、正面突破はやつぱり無理か。しかし二発も食らうと流石に痛すぎる。頭がかち割れそうだ。

「だ、大丈夫? 桐崎君」

「ご心配なく。これくらいなんてことないですよ」

嘘だ。隣の席の女の子に心配されて咄嗟にカツコつけてしまった。本当は今すぐに頭を抑えて机に突っ伏したいです。でももう後には引けねえ。クールを突き通すんだ僕。

「そ、そう? 男の子は凄いね。私なんて織斑先生に叩かれたら痛みでうずくまっちゃうよー」

「(…そうなるのが普通です。むしろ真顔を保てる僕がおかしいくらいだよ)」

周りからの印象というのは大事だ。いずれ眼鏡を勧める時に相手から何だこいつと思われていては交渉成立もあつたものじやない。だから大衆の目があるときは変な人間にならないよう自分自身に気を張つていてる。

「む、そろそろ時間か。少し早いが授業はここまでにする。昼休みが終わるまでには席に着いているように」

「「はい」」

「おや、もうそんな時間か。ぼーっとしてたからあんまり時間を意識していなかつた。「どうしたのだ優。体調でも悪いのか?」

「ちよつと考え方をしてただけですよ。心配は無用です等さん」「そうか。ならないんだ」

授業が終わつてすぐに等さんが僕の元へ来る。お昼ご飯を一夏と三人で食べるためにこれから食堂へ向かうからだ。

あ、そうそう。彼女は目つきが鋭かつたり人を近寄せない雰囲氣があつてちよつと怖そうに見えるけど、根は思いやりのある優しい子なんだ。そこは昔から変わつてないね。後美少女なのも。

「勘弁して下さいまし桐崎さん。そんな腑抜けた様子ではわたくしとの対決に万全な体制で臨めませんことよ?」

…え?

「今の僕に言いましたか？」

「貴方以外に桐崎という方はこのクラスにいませんわよね!?」

「だって急に話しかけられたら聞き返したくなるでしょう。そんな楽しくお喋りするような仲でもないんだから。お近づきになりたいとは思つてるけど、オルコットさん僕と一夏に対しては友好的な感じじやないし。

「全く。素人がこの今まで代表候補生のわたくしと勝負になるのかしら」

「あ、でしたら僕に I.S のことを教えて頂けませんか？ オルコットさんは代表候補生とのことで優秀かと思われますし、お願ひしたいです」

「なつ、ゆ、優!!?」

「あらあら。ふふつ。中々分かつていますわね。そう、わたくしはエリートなのですわ！ 下々の方の頼みとあらば教えて差し上げてもよくつてよ」

「…優、その役目は私に任せて貰えないだろうか。I.S についての知識だけなら私でも教えてやれるぞ」

「ちよつと、人への頼みを横入りして奪おうとするは何事ですか？ それに貴女は代表候補生ではないと思われますが」

「私は”篠ノ之東の妹”だ。代表候補生でもなくとも十分さ」「むむむつ」

あの…お二人さん？どうして交わし合つてる視線の間で火花が散つてゐるのかな？僕が悪いの？これつて。

それと篠さんの今の発言で皆ひそひそ会話し始めたよ。まあ東さんの妹だなんて聞いたら驚くよね。

「優、篠、早く行こうぜ…って、な、なんだよ？どうしてオルコットさんと篠は俺を睨んでるんだ？」

「こ、この話はやめにしましよう！ね？今は昼食の時間ですから、此処で争つていては時間も無駄にしてしまいますよ」

「…わかりましたわ」「…ああ。わかつた」

よ、よし、何とかこの状況を落ち着かせられたぞ。助かつたよ一夏。君の空気を読まないプレーが僕を救つたんだ。

「行くぞ優。一夏」

「は、はい」「おう」

…さつき篠さんは優しい子だつて言つたけど、しかめつ面でいかにも不機嫌ですよ
オーラが出てると流石に怖いです。はい。

僕はただオルコットさんにISについて教わりたかつただけなんだけどなあ。願わくば一対一で。ほら、例えばこんな感じかな。

『あら、満点ですわね。素晴らしいですわ。それでは頑張った^ご褒美に、膝枕をしてあげてもよろしくつてよ?…ふふつ。冗談ですわ』

控えめに言つて最高です。放課後の教室で二人つきりとかだつたらもう言うことないね。あ、やばつ鼻血出そう。

でもどうしようか。ついあの場を切り抜けようとさつきの話を無しにしちやつたけど専属教師獲得のチャンスも失つちやつたよ。困つたなあ。

「で、これがこうなつてるから——」

「ふむふむ、なるほど」

その日の夜に無事解決しました。今僕は簪さんに I.S.について色々と教えて頂いているところです。

しかし驚いた。まさか簪さんが日本の代表候補生だつたなんて。

「簪さんは凄いですね」

「な、何いきなり。やめてよ」

そのわかりにくいけどよく見るとちょっと照れてる所も素敵です天使様。こんな世の汚れを感じさせない素晴らしいものを見せてくれるなんて神に感謝に尽きます。

「一週間後に戦うんでしょ。その調子で大丈夫なの？」

「どうでしようね。アリーナは当日まで借りられないみたいなので本番のみの操縦となつてしまいますが、まあなんとかなるでしよう」

「代表候補生を甘く見過ぎ。初心者が束になつても恐らく勝つのは難しい」

「甘く見てるつもりはないですよ。ただ考え方過ぎも良くないかなと」

「無謀な挑戦かもしれないのはわかつてゐるけど、僕と一夏も男だ。大人しく尻尾巻いて

逃げるようなことはしたくないからね。

「せめて知識くらいは頭に入れておきますよ。そうすれば少しは変わるかも知れないですかね」

「：頑張つて。応援してる」

天使からのありがたいエール。せつかく応援してくれているんだからちよつとはかつこいい所見せられるようになきや。

「よし、まだやるか」

もう少し今日は頑張ろう。簪さんも付き合つてくれてるからね。

7. 金髪美少女を眼鏡つ娘にする準備は整つた

（クラス代表決定戦当日）

戦いの日がいよいよきてしまつた。天氣は快晴、そして時間はもう放課後。まずは今日まで僕と一夏が何をしてたかを軽く話そーか。

僕は特に面白いこともなくひたすら勉強していた。簪さんだけじやなく山田先生にも放課後や昼休みに色々と聞きに行つたりしたよ。何でも親身になつて教えてくれるからついつい頼つちやつた。

：べ、別に眼鏡かける人と長い時間一緒に居られるから勉強頑張つてたわけじやないよ？本当だよ？チガウカラネ、ウン。

一夏はどうやら簪さんと剣道三昧だつたみたい。夜一緒にご飯食べる時へ口へ口になつてたよ彼。一体どんなしごきを受けたのかなあ。

まあ昔から簪さんは剣道に関して厳しいところあつたからしようがないのかな。きつと鬼のようになつて剣を振つていたんだろうね。

「ちーちゃんは引っ込んでてもらえるかなあ。今は私がゆーくんとお話してるんだからさ」

「部外者はさつさとご退場願おうか。桐崎の専用機さえあればお前はもう用済みだ」
I.S学園に直接専用機を持つてきてくれた東さん。それはいいんだ。だがしかし、そ
うなるとピットで千冬さんとご対面することは避けられなかつた。

そして気がつけば二人は威圧感だけで人を殺せそうなくらいにまで昂ぶつていた。
はああ。もう僕には止められないよ。

「随分と偉そうな口を聞くんだね。いくらちーちゃんでもそんなこと言われたら捻り潰
したくなっちゃうなあ」

「上等だ。何なら打鉄でも借りて派手にやろう。生徒達の前で無様に叩き潰してやる」

「そつちこそボコボコにされて泣いたりしないでよね。ブリュンヒルデさん？」

いや待つて二人とも。落ち着いてください。貴女達に慣れ回られたら手がつけられなくなっちゃいますから。今すぐに挑発したり睨み合うのをやめてください。視線の間でバチバチに火花を散らすのをやめてください。

「千冬姉が勝つに決まってるだろ。俺の自慢の姉なんだからな」

「姉さんを甘く見るなよ。千冬さんといえどIS開発者である私の姉には敵わんさ」

そして傍らでは二人の弟と妹が姉論争を始める始末。君ら姉のこと好き過ぎじやない。それと一夏はまだしも篝さんが東さんを支持するのもちよつと意外だし。

收拾がつかなくなつて今にも戦場になりそうなピットに入り口から癒しの女神が入室してくる。砂漠を一瞬でオアシスに変える我らの副担任山田先生だ。

「お、織斑君、届きましたよ！ 織斑君の専用機が…きやあつ！」

「ツ、危ないつ！」

「むにゅんつ

「ひやあつ！？」

「あつ、ごめんなさい！」

やつちまつた。駆け足で戻つて来た山田先生がこけたので正面から支えようと腕を伸ばしたら胸を驚掴みにしてしまつた。

「い、いえ、大丈夫ですよ。気にしないでください桐崎君」

「え、でも…」

「これ以上引きずられる方が私は恥ずかしいのでこの話はこれで終わりです。い、いいですね？」

「は、はいっ！」

僕としたことが女性に恥をかかせてしまつた。反省しなくては。

…こんな時に不謹慎かもしだれないと、ちょっと頬を赤くして胸元を隠す仕草をする山田先生めっちゃ可愛いんですけど。眼鏡から覗かせる上目遣いの視線も加わってより魅力がアップしてる。

『めっ、ですよ。こういう事は大人になつてからじゃないといけません。…だから、今はこれで我慢して。ね？』

あ、やばい。試合前なのに妄想が捲つて鼻血が出そう。一体何をしてくれるんですかね先生。事と次第によつては余計我慢できなくなりそうな気がします。いや、我慢したくないつていうのが本音かな。

「…ふーん。ゆーくんはおつきいおっぱいが好きなんだねえ。そんな情熱的な目で見つ

めちゃつてさ。私じや物足りないのかなあー?」

「あ、あの、東さん? どうしてこつちに寄つてくるんです?」

口は笑つてゐるのに目が微塵も笑つてないんですけど。まさか山田先生で妄想してゐのを勘付かれた…?」

ゆつくりとこつちに歩いてくるのが死までのカウントダウンに見えてきたよ。天災怖い。

「おい桐崎。貴様教員に手を出すはどういう事だ」

「手を出したつていうのは語弊があるような: 「ん?」ナンデモナイデスハイ」大事な生徒に向けていいプレッシャーじゃないですよね先生。僕のこと獲物か何かだと思つてます? この後狩られるのかなあ。

思わず言い訳を引つ込めちゃつたし。世界最強怖い。

「後でゆつくりお話しようね。 ゆ、う、く、ん?」

「…はい」

未来の嫁からの言葉に僕はただ頷くことしかできなかつた。

なんか僕、将来的に東さんの尻に敷かれる気がしてきた。だつて逆らえる気がしないんだもの。

「よし、これで準備おつけーだよ」

「ありがとうございます東さん」

流石は東さんと言うべきか。時間もかからず全ての基本準備が終わつた。今僕は一夏より先に専用機に搭乗している。後は出撃するだけだ。

「優」

「ん? どうしたの?」

「俺との試合もあるんだからな。そこの所忘れるなよ」

「あはは、わかってるよ一夏」

内心楽しみにしてるんだよ。君とこうして”戦う”ってことをするのは初めてだか

ら。僕は剣道はやつてなかつたからね。

「……」

「筈さん」

「ツ、な、なんだ?」

「えっと、何かエール的なものを頂けると嬉しいのですが…」
美少女からの応援つて欲しいよね。力になるし。

「…勝った時に褒めてやる。だから負けるなんてことは許さん」
なつ、後からご褒美パターンだとつり?!

そんなこと言われたら負けられないじやないか。篝さんは僕をやる気にさせるのが
上手いね。

「桐崎」

「はい」

「負けるなとは言わん。だが初心者なりに足搔いてみせろ。いいな」

「頑張つてくださいね桐崎君。私応援しますから!」

教師が片方に肩入れしていいんですか山田先生。まあ僕は嬉しいけども。

千冬さんも千冬さんなりの言葉で今の僕がまだスタートラインにいることを改めて
実感させてくれた。
「アリーナに着いたら機体についての説明が音声で流れるようにしておいたから。ちや
んと聞いておいてね」

「わかりました。何から何までありがとうございます束さん」

「いいんだよ気にしなくて。私が好きでやつてることだからね！」

あの東さんが僕のサポートをしてくれてるんだ。少しは良いところを見せられるよう頑張ろう。

ピットから飛び立ち僕はアリーナに降り立つた。辺りをぐるりと見渡すけど誰もない。どうやらオルコットさんはまだ来ていないみたいだ。

『あーあー。聞こえるかなー?』

『うわっ、た、東さん!?!?』

『これは録音音声だよ。私が直接喋ってるわけじゃないからよろしくね!』

いきなり声が聞こえてきたからびっくりした。多分これ周りには聞こえないよう

なってる…よね？

というか束さんが声入れたんだ。機械の声と違つて落ち着きはするけど、なんか緊張感が足りないから気が抜けちやいそう。

『それじゃあ説明するよ。この機体は二つのことに特化させてあるんだ。まず一つ目、今ゆーくんは普段とは違う眼鏡をつけてるよね？』

専用機に乗る前に眼鏡を外してくれと束さんに言われた。疑問を持ちながら言われた通りにして専用機に乗ると、装甲を身体に纏うのと同時に新しい眼鏡が装着されたんだ。度もちゃんと合つてるやつがね。

『その眼鏡はね、』自分に飛んでくる攻撃の軌道やコースを瞬時に予測して視界に表してくれる”っていう優れものなんだよ！ビームでも斬撃でもパンチでも攻撃だつたらなんでもおつけー！でも相手の機体の動きは示すことはできないから注意してね』

…なんか凄そうだぞ。でも攻撃が見えたとしても避けられなかつたら意味ないよね。結局は僕の操縦技術次第つてことになるのかな。

『そして二つ目は他の I-S とは比べ物にならない程の”機動力”とにかく速さを追求したんだよ。敵から見たら一瞬でゆーくんが消えたように感じるくらい速いんだぜ！』

なるほど。速さが回避だつたり攻撃のサポートになるわけか。これは良い。

『あ、詳しい原理は秘密ね。でもゆーくんの身体に負担がかかるようなことはないから

安心して。私の未来の旦那様を傷つけることは絶対にしないよー』
う、うむ。なんか照れくさいなあ。嬉しいんだけども。

『さ、説明はここで終わりつ。今日はゆーくんの初戦つてことではまづは“ISの操縦に慣れる”のと“相手の攻撃を避ける”ことを目標にしようか。頑張ってね！』

束さんも千冬さんと同じで勝てとは言わないんだね。あの二人は先を見据えてる気がする。戦いは成長するための過程であると教えてくれてるんだと僕は思う。

『あつ、そうそう。もう一つ言うことがあるのを忘れてたよ』
ん、なんだなんだ？

『ふふつ、ゆーくんが頑張つたらお姉さんからちゅーのご褒美があるかもしねないよ。
だから一生懸命戦うように！それじやあ、また後でね』

「…ずるい人だなあ。束さんは」

勝つたらとは言つてないからね。頑張つたらだからね。これは期待できるぞ。うん。

「……ふ、ふふふふふ」

「（えつ、いつの間にオルコットさん来てたの？）」

録音音声を聞き終えて意識を外に向けると正面にさつきまでいなかつたオルコットさんが俯いて立っていた。な、なんか肩震えてない？頬もぴくぴくしてんしもしかして怒つてらつしゃいます？」

「お、オルコットさん…？」

「…わたくしが何度話しかけても無視ですのね。これは完全になめられていてますわよねえ…」

「え、いや、そういうわけでは「ツツ、今更何を言つても遅いですわあ！ぼっこぼこにしてさしあげますから覚悟なさい!!？」

ビシッ、と指を突きつけられ宣言される。そんなに長い間無視しちやつてたのか。東さんボイスの機体解説が始まつたのと同じくらいにアリーナに降りてきたのかかもしれないな。

さて、此処で話を変えよう。皆は僕が戦う理由はわかっていると思う。それを改めて「オルコットにもちゃんともう一度伝えておこうか。”約束”を忘れられてたら困るし。

「…なんですか」

綺麗な金色の長い髪。そしてその怒ついていても整つた顔立ち。
ああ…きっと眼鏡が似合うんだろうなあ。

「覚悟するのは貴女の方ですよ。僕の前で眼鏡をかける心の準備をお忘れなく」

——全ては眼鏡つ娘のために。さあ、僕達の戦いを始めようか。

8. クラス代表ではなく眼鏡つ娘をかけての戦い

『前方に I S を確認。敵性と判断。これより操縦者が装着している眼鏡に敵機からのエネルギー反応を表示します』

オルコットさんがライフルを僕に向けて構えると、さつきの東さんの声とは違う普通の機械音声が流れ始めた。そして少しづつ僕の視界がほんの少し緑がかつた景色に変化していく。これで相手からの攻撃が見えるようになつたのかな。

「（えつと、とりあえず武器の確認をーー）
「はっ！」

ビュンツ!!?

「うわあつ!!? あ、危なつ!!」

咄嗟に横に動いてなんとか躲す。な、中々に怖いね、ビームが飛んでくるっていうのは。軌道の表示がなかつたら絶対避けられなかつたよ今の。完全に油断してたから。

「運良く避けましたわね」

「あの、オルコットさん？此方は初心者なので、最初はゆっくりと戦いを進めて頂けるとありがたいのですが…」

「勝負において手を抜くことはこのセシリア・オルコット、断じて致しませんわ。貴方も男ならば真っ向から立ち向かつてみなさい！」

真っ向から、ね。オルコットさんには悪いけど少しばかり様子見させてもらうつもりだ。まずは僕の専用機がどれくらいの性能なのかを把握しておきたい。

ピピッ ピピッ

「（ん、何だ？）」

ピシューッ!!?

『機体の速度制限を解除。《S P E E D—T Y P E》への移行が完了。出力速度の上限を解放』

「…なるほど、これで本当の準備完了か」

音声と共に僕の機体から空気が抜けたような音がした。でも身体に纏っている装甲が無くなったり薄くなったりとか変化があつたわけじゃないみたいだ。さて、それじやあそろそろ束さんが言う”速さに特化した”っていうのがどれ程の物なのかそろそろ体験させて頂こう。

「——何度も避けられると思ったら、大間違いですわよ！」

次弾を撃つために構えるオルコットさん。よし、じゃあ右に避け——

ヒュンツ

↓ side 千冬↓

「…束」

「ん？なんだいちーちゃん」

「お前が桐崎に渡したあの I.S.、まさかとは思うが”ふざけた性能”をしているわけじゃないだろうな？」

「えーやだなあ。初心者にいきなりボーナスは与えないってー」

突出して機体のスペックが他の者達より高いと色々と面倒だ。不満の声等も出てくるかもしれない。天災が手を掛けたというなら尚更だ。私はそこを危惧している。

男性操縦者というだけで何かと不自由なのだろうから、余計な面倒事であまり負担を掛けさせたくはない。

「別に特殊な武装とかはゆーくんの専用機には入れてないよ。ただちよつと他の I.S. より機動力の面で優れてるってだけ」

「…お前の言う”他の”というのは”世界中全ての”という意味で捉えていいのか？」

「んふふ、さあ？どうだろうねえ」

はあ：仕方ない。後で私の方でも桐崎の機体のチェックをしておくか。

「姉さん、優は本当にただ”動いて避けた”だけなんですか？私には速すぎて全く見えませんでしたが…」

「うん、そうだよ。あれはゆーくんの機体が出せるスピードで横に動いて”攻撃を躲した”だけ」

「アリーナの壁に衝突しそうになつたのを見るに、あの機体を扱うのには難がありそうだな」

「初動で派手に突っ込まなかつただけゆーくんには見込みがあるよ。きっとすぐに乗りこなせるんじやないかなー」

「お前も災難だな”優”。こんな奴に目を付けられるなんて。

ハイパー・センサー越しにオルコットさんの驚いた顔がよく見える。きっと彼女からしたら視界から僕が一瞬で消えたようにでも見えたのだろう。まるで瞬間移動でもしたように。

でも実際は違う。僕はほんの数秒の間にこの身体で体感した。超スピードでアリー

ナの壁に激突しそうになる恐怖を。

遊園地の絶叫系の乗り物なんかより100倍怖かつた。泣きそうです。泣かなければ。

『武装を開けます』

「まだ機体の操縦に慣れてないしなんなら恐怖を植え付けられたのに早速戦えと言うんですかそうですかスバルタだなあちくしよう」

僕の手元に粒子状の光が浮かぶと、そのまま光は集結し一本のライフルを具現化した。

「（銃か。作戦はどうしようかな）」

アリーナをこの機体の超速度で駆け回つてオルコットさんを翻弄し、隙を見て狙いを定めて撃つ。そしてまた駆け回る。こんな感じでどうだろう。作戦としてはいいんじゃない？ヒットアンドアウエイ的な。出来るかどうかは別にしてね。

「…デタラメな速さですわね。瞬時加速が霞んで見えますわ。でも、次は外しません！」
「いえ、次は僕の番です」

チャキッ

「あら、交戦の意思是はあるのですね」

「当たり前です。僕は貴女に勝つつもりですから」

「まともに I S を操縦したこともない初心者が、代表候補生に勝てると？」

「——それを、今から証明してみせます」

『ターゲットロック。エネルギー射出準備完了。敵機からのエネルギー反応を感じ。攻撃に備えてください』

互いに構え合う。

先に撃つたのはオルコットさん。先手を取られた僕は彼女に向いていたライフルを降ろし、一先ず回避に専念する。

ビュンツ!!? ビュンツ!!?

「(速度を抑えるんだ。今の僕じゃ、さつきのスピードのまま操縦することは出来ない：！)」

集中力を高める。一瞬足りとも気を抜かずに、見える射撃の軌道に当たらないよう機

体を動かす。

今の僕の機体が出しているスピードは先程の超速度の半分も出でていないだろう。それでも十分速い方だとは思うけど、オルコットさんは僕を撃ち抜こうと的確に居場所を捉え、ビームを放つてくる。

「ツ、逃げ足だけは一流ですわね……！」

「イライラしてはいけませんよ。勝負事において冷静さを欠いたら、足元をすくわれてしまします」

「そんなこと、貴方に言われなくとも分かつていますわ！」

オルコットさんからしてみれば、格下である僕に逃げ回られて攻撃が当たられないのが気に食わないんだろう。代表候補生としてのプライドみたいなものもあるに違ない。

「はあっ！」

『ヒット。敵機のSE減少』

対して僕には背負つているものなんてない。あるとすれば、東さん達からの期待と彼女に眼鏡をかけさせるという僕に与えられた使命かな。別に与えられてないけど。

『…うう、は、恥ずかしいですわ…』

『顔を背けないでよ。ほら、もつとよく見せて？オルコットさん』
『あつ、き、桐崎さん…』

うん。たまには僕からグイグイ行くのも悪くないかも知れない。強気な彼女がしょらしくなるのも見てみたいし。

『被弾。S E 減少』

「あつ」

…試合中なのに妄想が捲つてしまい、操縦の方を怠りました。しつかりするんだ僕。
気を抜くんじやない。

「わたくしとの試合中によそ事を考える余裕があるとは、いい度胸ですわね」
「……ど、どうして分かつたんです？」

「そんな気の緩んだ顔をしていれば誰でもわかりますわ」
な、なんと。顔に出てましたか。これは恥ずかしい。

「…失礼。試合に集中します」

妄想なんて後でいくらでもできる。今はこの戦いのことだけを考えろ。

「 side セシリアル

もうつ、一体なんなんですのこの殿方は！

代表候補生であるわたくしに勝つなどと無謀な宣言をしておきながら、試合中に何か嬉しかったことを思い出したかのように頬を緩め気を抜くなんて！

「つ、はああっ！」

……でも、彼の目はまだ決して諦めていない。最初に見せたあのとてつもない速さは見る影もないが、慣れないなりに頭を使い操縦しているのがわかる。勝利を手にするためにわたくしに牙を向いている。

「……」

「……ん？ どうかされましたか、オルコットさん」

わたくしがライフルを降ろせば、同じく攻撃の手を止めて敵だというのに心配の言葉をかけてくる。

「お答えください、桐崎さん。貴方は何故この戦いに本気で挑まれるのですか？」

——知りたい。この男が戦う理由は何なのか。どうしてここまで必死になれるのか。

「そう、ですね。負けられない理由があるからですかね」

「その理由とは?」

「僕は別に男としての誇りやプライドを掲げて戦っているわけではありません。そんなものは一夏に譲つて任せます」

「…そんなもの、ですか」

「男らしくないと言われたらまあその通りかもしません。でも、僕にだつて譲れないものもあります」

先ほどまでの真剣な顔とは打つて変わつて、純粋な子供のような柔らかな笑顔を浮かべる桐崎さん。

「僕、”眼鏡つ娘”が大好きなんです。というかそれ以外の属性は全く興味ありません」

「…は?」

「め、メガネ?」

「眼鏡つ娘を採むためなら何だつてします。宿題の手伝い、掃除当番の手伝い、教材運び

の補助等色々と。後は休日にショッピングモールで洋服選びの参考意見役なんかもし
ましたね」

「最後のは、お手伝いというよりただ遊びに行っているだけですわね。

「そして、このISバトルを経て貴女に眼鏡をかけていただけなら僕は僕なりに足搔
いてみせるつもりです」

「(教室でわたくしに言つていましたわね。自分が勝つたら眼鏡をかけてくれないか、
と)」

「——絶対、貴方に眼鏡をかけさせます。だから僕はここで負けるわけにはいきません」
「(…それが、貴方の戦う”理由”なのですね)」

再びライフルをわたくしに向けて構え直し、戦いに意識を集中させている。

周りからすればそれはふざけた理由かもしない。しかし、彼にとつては他の何もの
にも代え難い大切なモノなのだろう。わたくしにもその熱い想いは確かに伝わつてき
た。

試合中にオルコットさんの動きが急に止まつたからどうしたのかと思つたけど特に問題はないみたいだ。よし、じゃあそろそろ再開し——

「先程までの戦いでの無礼を謝罪いたしますわ」

「ん？ ああ、うん。……え、無礼？ 何のこと？」

「ここからは、わたくしの全力で貴方と戦わせていただきます」

　彼女がそう言うと、オルコットさんの周りに4基の新たな武装と思わしき物が彼女を囲むようにフワフワと浮き始めた。な、なんですか？ それ。

「桐崎さん。わたくしの”ブルー・ティアーズ”と踊つていただく準備はよくて？」「……はは、嘘ですよね？」

　ここにきて一体僕は何処で彼女の闘志に火をつけてしまつたのだろうか。出来るなら全力を出さない今までいて欲しかつたなあ。そんな隠し球があつたなんて。
「さあ、いきますわよ！」

「え、ちよ、まつーーー」

試合の結果は僕の負けだつた。本気を出した代表候補生にアリの如き1匹の初心者が勝てるわけなかつたんだよね。

終わつた後に彼女に握手を求められた。何でも初試合にしては素晴らしい戦いだつたとのことだ。美少女に褒められたのは嬉しいけど少し残念。勝ちたかつたから。

まあ今は仕方ないか。もつと技術と知識を磨いて強くなつてからリベンジしよう。そして絶対にオルコットさんに眼鏡をかけてもらうんだ。

「優」

「どうしたの？」

「…お前さ」

「うん」

ちなみに僕と一夏の試合。彼にとつてはこれが初戦である。

「さつきから何だよその I.S、動くの速すぎるだろ!!? 僕全然見えないんだけど!!?」

「えー、オルコットさんはちゃんと見極めてライフルで撃つてきたよ?」

「いやいや全然無理だろこんなのおおお!!?」

「あはは…」

「ごめんよ一夏。でもこれは勝負だからね、手は抜かないよ。

オルコットさんとの試合は善戦していたけど、僕の時と違つて最初から気迫が凄かつたから大変そうだったなあ。そこも謝つておこう。僕が彼女に火をつけてしまつたんだ。何で着火したかは分からないままだけどね。

「全く、精進が足りんぞ！一夏、優！」

「…はい」「俺ら代表候補生相手に頑張ったと思うんだけど…」

篝さんには試合後正座させられました。束さんと千冬さんは知らぬ顔して雑談してたよ。：部屋に戻つたら、篝さんに慰めてもらつてから寝ようかな。

番外編　～赤髪眼鏡つ娘の意外な一面～

「…桐崎、優」

僕の名前を呼ぶ目の前の彼女の名は“ベルベット・ヘル”。ギリシャの代表候補生にして赤髪美人お姉様の眼鏡つ娘だ。

あまり人と関わらない孤高の存在っていうのが彼女を表す言葉だろうか。『私に関わらないで』と面と向かって言われたこともあるが、そんな彼女に何度も僕から話しかけに行つていつしか心を開いてもらつた：んだと思う。今は普通に雑談相手になつてくれるものの。

まあ眼鏡つ娘は一人たりとも逃さないのが僕の流儀なんだけどね。

「な、なんでしよう？」

「…どうして、此処にいるの」

「えーっと、その、た、たまたまですかね」

嘘だ。珍しく上機嫌なベルベットさんを見かけたから気になつて後をつけていたんだ。表情には出ていなかつたが少し浮き足立つていたのを僕は見逃さなかつた。

「…偶然で、こんな所には来ない」

「そ、そんなことはないですよ？僕が学園内を散歩するときは此処を絶対通りますし！」

今僕とベルベットさんがいるのは学園の中でも人目から外れた場所。校舎裏みたい
な感じの所だ。滅多に人は通り掛からないだろう。

「…………」

「…………」

絶賛無言で睨まれ中でござります。でも頬はちょっと赤くなつて照れも混じつて
るのが可愛いよね。…うつ、目つき鋭くなつた。ベルベットさん僕が妄想とか邪な考
してゐるの見抜くの得意だからなあ。

にやーお

「——ツツツ!!？」

「可愛いですね、その猫。ベルベットさんの足にすりすり甘えて」

ベルベットさんの顔がより一層真っ赤に染まる。別に猫が好きなのって恥ずかしが
ることじやないと思うけどなあ。まあ他の生徒は驚くだろうけど。
「…変かしら？私が裏で猫を可愛がつてゐるなんて」

「そんな事ないですよ。普通の女の子らしくていいと思います」
にやあ、にやあつ！

「随分と懐かれてますね。何回も迷い込んで来てるんですか？」
「…ええ。少なくとも1ヶ月以上前から私はこの子を知っていたわ」

可愛がり方が手慣れてますもんね。猫の方も気持ちよさそうだ。
「その子に名前とか付けてないんですか？」

「…あるけど、貴方には教えない」

「えー。意地悪しないで下さいよー」

みやあみやあ、にやつ！

「あつ、ちよつと。はしゃぎ過ぎよ」ルビイ」

「へえ、ルビイちゃんですか。いい名前ですね」
…いやいや、そんなに睨みつけないで下さいよ。僕何も悪いことしてません。貴女が
勝手に自爆しただけです。

勝手に自爆しただけです。

「…もういいでしょ。用がないなら早く此処から消えて頂戴。私はこの子の相手をするから」

「はーい」

「ちえつ。仕方ないか。珍しいものも見れたり、ここは大人しく退散しますかね。」

ベルベットさんからお邪魔虫宣告を受けた僕が一人廊下を歩いていると、向こう側から水色の髪をした女子生徒がやつて来る。

「あら、優君じゃない。元気にしてるかしら？」

「ええ。元気ですよ。楯無さんもお仕事を放つたらかしてお元気ですか？」

放課後のこの時間は生徒会室で虚さんが溜まつた書類を片付けたり、本音さんが寝ていたりお菓子を食べたりと何かしているはずだ。楯無さんが廊下をブラブラしているということはサボリのはず。まあいつもの事だけど。

「仕方ないじやない！私だつて疲れてるんだから！」

「だからつてサボリはよくありませんよ。虚さんも頑張つているんですから」

「…優くんつて簪ちゃんと虚ちゃんにはやたらと甘いわよねえ。この眼鏡フェエチめ
僕にとつては褒め言葉でしかありませんよ。

「眼鏡をかけていただけるなら楯無さんにも紳士的に接しますが」

「うーん。遠慮しておこうかしら。私視力は悪くないもの」

「そういう方には伊達眼鏡を勧めているのですが…楯無さんはかけてくれなさそうです
ね」

「ふふつ、よく分かつてゐるじやない♪」

簪さんとの仲直りに一応僕だつて貢献したんだから少しくらいかけてくれてもいい
のに。今まで出会つた女性でトップレベルに頑固かもしぬれないなこの人。
「眼鏡はかけてあげないけど代わりにいい話があるわよ」

「何でしよう？」

「今週末から駅前のショッピングモールに新しく”ペットショッピ”がオープンするそ
うなの。優くん暇だつたら簪ちゃん誘つてデートしてきたら如何かしら？」

「（…簪さん、週末は整備室に籠るつて言つてた気が）」

嬉しい話ではあるが彼女は誘えなさそうだ。東さんを連れて街中にホイホイ出るわ

けにも行かないし、今日は見送りかなあ。

「…あ、そうだ。ベルベットさんを誘おう。楯無さん、いい話をありがとうございました」

お辞儀をしてこの場を離れる。猫好きも発覚したことだし多分来るんじやないかなあ。むしろ僕が誘わなくとも一人で行つてそうだ。

「優君つて簪ちゃんと篠ノ之博士だけじゃなくてベルベットちゃんも好みだつたのかしら。…はつ!?ま、まさか、う、浮気!?お姉さんこれ以上乱れた関係は許さない」

「日曜日・駅前の街灯の近く」

「あ、いた。ベルベットさん！」

大きい木の下にいつも通りの立ち姿で待っていた私服姿のベルベットさん。大人っぽいオーラが普段より一層漂っている。綺麗だなあ。

「こ、声が大きいわよ！」

「別にいいじやありませんか。何か問題でも？」

「……ない、けど」

変な所を気にする人だなあ。何もこれからやましい事するわけじゃないのに。

「おつと。ここで話していくもあれですね。早速行きましょうか」

「……ええ」

僕達はこれから新しくオープンしたというペツトショップへ向かう。楯無さんから聞いた次の日に誘つてみたが、二つ返事で了承が返ってきたよ。珍しい。

「……早く、行きましょう」

ちゃんと着いて行きますからそんな力強く引っ張らなくても大丈夫ですよ。

「――――――」

「……入り口なので他のお客様の邪魔になっちゃいますよ」

お店に入るなりすぐにカチン、と氷のように固まるベルベットさん。その視線の先にはショーケースに入れられて展示されているたくさんの可愛らしい子猫達が。「ふ、ふんっ。そ、そそそそこまで大したことないわね。猫がいるくらいで私は動搖しない――」

にやーお

「はあああ…か、可愛いわあ…！」

「(流れるような即墮ちありがとうございます)ざいます」
目を輝かせてへばり付いてるよショーケースに。

「ふふつ、可愛らしい彼女さんですね」

「…はい。そうですね」

店員さんが僕に話しかけて来ちゃつた。恥ずかしい。はしゃいでいる子供を持つ親の気分だ。

「猫が好きな女性は”猫をかぶる”のが得意なんて言うんですよ。普段はクールを装つていたりする人が、実は甘えたがりみたいな一面を持つてているなんてこともあるんです」

「へえ、そうなんですか」

ベルベットさんはどうなんだろう。彼氏とか夫が出来たら裏では猫になつて甘えるのかなあ。

『あの、ベルベットさん？もうそろそろ1時間くらい経ちますよ？』

『…まだ、離れたくない』

『寝る前にまたハグしてあげますから。とりあえずお風呂にーー』『やだ』

『…もつと、優のことぎゅつしてしてみたいの』

…自分の才能が恐ろしくなるよ。ここが外じゃなかつたら鼻から大量出血で倒れてた。絶対。

「おつと、まあこれは余計なお世話かもしませんね。それではごゆっくりどうぞ。そして彼女さんとお幸せに♪」

「(彼女じやないんだけど…まあいつか)」

必死になつて否定するのもなんか悲しくなる。ベルベットさんも聞いてないし、いいよね。

にやつ、にやあつ！

「…ああ。天国はここにあつたのね」

「どうでしょう。お気に召しましたか？」

「ええ、最高よ。でも触れないのが残念ね：」

まあ此処はペットを飼うためにやつてくる場所だからね。きっと触れ合いコーナーみたいのをやつてる所もあるんだろうけど、基本は鑑賞しかできないからなあ。「いや、待てよ？」あの、ベルベットさん

「何。私今忙しいから後でーー」

あるじゃないか。猫と好きなだけ戯れられる場所が。

「猫力フエ」つて知っています?」